

コミュニケーション・SDH教育に「やさしい日本語」を活用する

武田裕子・イ・ティンザ・キン（順天堂大学） 岩田一成（聖心女子大学）
新居みどり（NPO法人国際活動市民中心） 石川ひろの（帝京大学）
岡崎史子（新潟大学）

「やさしい日本語」とは、相手に合わせて分かりやすく伝える日本語のことです。本WSでは外国人模擬患者とのロールプレイを通して「やさしい日本語」を体験し、教育への活用法について検討します。

日本に住む在留外国人は396万人に上ります(2025年6月現在)。外国人診療＝英語と考えられがちですが、3/4の在住外国人が日常会話レベル以上の日本語を話します。一文を短くする、オノマトペ（擬音語・擬態語）を使わないなど、ちょっとしたコツで伝わりやすさが増します。

実は「やさしい日本語」は、外国人だけでなく高齢者や子どもたち、言葉の理解や聴こえに困難を抱える障害者にも役立ちます。相手に合わせるためには、コミュニケーションの特性を理解し生活背景にも目を向ける必要があります。ことばの壁は医療アクセスを困難にします。医学教育モデル・コア・カリキュラムが求める健康の社会的決定要因（Social determinants of health: SDH）について、理解を深める教育となります。

アソシエイトポイント：TL 0.25

対象

卒前・卒後の医学・医療者教育に携わる教員・指導者、特にコミュニケーション教育や英語授業、多職種間教育に関心のある方

定員

30名